

内閣総理大臣演説の文体分析 2

— 明治時代の伊藤首相から西園寺首相について —

An Analysis of Style in Public Speeches Given by Prime Ministers in Japan

— From Hirobumi Ito to Kinmochi Saionji in the Meiji Era —

中 村 秩祥子
NAKAMURA Chisako

キーワード

[文体分析] Style analysis · [施政方針演説] Policy speeches

[内閣総理大臣] Prime ministers in Japan · [機能文法分析] Functional grammar analysis

[明治時代] The Meiji Era

I. はじめに

本稿は、「内閣総理大臣演説の文体分析」(中村2004)に続くもので、日本の初代首相伊藤博文から明治期の各首相の初めての施政方針演説、すなわち就任演説を言語的観点から分析するものである。また、中村(2004)で分析した鳩山首相から大平首相までの就任演説の特徴とも比較し、時代及び文化的背景による文体特徴も考察していく。

言語分析にあたって、Halliday(1994)の機能文法論を基本枠組とする。Hallidayは、機能の面から言語表明を分析することを試みている。その理論に基づき、表現形式の特徴から、その表現効果について調べていくことにする。

明治期の内閣総理大臣は、7名が担当した。すなわち、初代首相の伊藤博文、黒田清隆、山縣有朋、松方正義、大隈重信、桂太郎、西園寺公望である。第一回帝国議会は3代目の山縣内閣から始まるので、2代目の黒田首相の就任演説は存在しない。また、第一次大隈内閣時には帝国議会は開かれなかったため、このときの就任演説もない。そして、初代首相の伊藤博文の就任演説は、第2次伊藤内閣時の第一回施政方針演説を扱う。したがって、時代順としては、山縣首相の就任演説が我が国初の首相の就任演説となる。本稿では、黒田首相と大隈首相を除く明治期の内閣の各首相の就任演説を時代順に扱う。

明治期の内閣は、1885(明治18)年12月から1912(明治45)年12月までである。明治憲法下では、内閣総理大臣は主権者天皇から内閣組織をする「大命」を拜するという建て前がある。つまり、内閣は天皇に対してのみ責任があり、国民(臣民)に対しての責任はなかった。内閣

は天皇直属の機関であった（岡野1985：16-19）。

本稿で扱う演説文は、首相が用意して読み上げた文である。書いた文章なので、必ずしも発音通りの表記ではなく、歴史的かな遣いで表されている部分もある。例えば、「～テアラウト」のように、実際の発音時では「～であろうと」となる部分である。また、助詞、助動詞、接続詞など漢字以外の部分はカタカナで表記されている。

II. Hallidayの機能文法

この章では、演説文を分析する枠組理論であるHalliday (1994) の機能文法について簡単に述べる。Hallidayは、意味から文法形式を考える姿勢をとり、形式の特徴とその意味の効果についてまとめている。特に、本稿で扱うのは、ModalityとFiniteとThemeの概念である。これらに関して、中村 (2004) ですでに触れているので、今回はHallidayが英語を例にして述べている部分を日本語へはどのように対応可能かについて説明するに留める。

Modalityとは、述べている内容に関わる蓋然性や義務性についての話者の判断を意味する。Hallidayは、モーダル操作詞 (modal operator) と称するcan, will, mustのような語をModalityの度合い別に分類している。日本語でもこれらの語に対応する「できる、しよう、でなければならぬ」などの語があり、話者の心的態度を表明するものがある。

Finiteは、英語では、付加疑問文にした場合の最後に現れる動詞群の一部のことを指す。これは、「発話の時」と「話者の判断」を示す。つまり、現在、過去、未来のような時制と先のモーダル操作詞に示される話者の心的態度である。

例えば、Mary is a girl, isn't she? やMary can swim, can't she? におけるisn't やcan'tに示される現在時制やcanに示されるモダリティーの度合いである。

Themeとは、文の最初の部分のことである。単文においては、主語として機能するtopic themeまでの最初の部分を指す。これらは、無標と有標に分類されることができる。有標であることは、無標であるよりも何らかの効果を生み出すために、使用されている場合がある。Hallidayが英語の場合で示した無標、有標の分類を日本語に適用した場合、叙述法、疑問法、命令法において典型的無標のthemeは、主格を示す助詞「は」「が」を含めた主語として機能する名詞群である。日本語の場合、主語が省略されることがしばしばある。そのため、他の要素が文頭に位置することも多い。容易に復元可能な主語の要素が省略されている場合は、有標であるとみなす必要はない。本稿では、接続詞、接続副詞、呼びかけなどを除き、主語の要素があるのに他の要素が前置されている場合に特に着目して、有標の度合いやその機能について考察することにする。

III. 明治期の内閣総理大臣の就任演説の文体的特徴

この章では、明治期の内閣総理大臣5名の就任後初めての施政方針演説の文体的特徴を分析していく。分析方法は、中村 (2004) の鳩山首相から大平首相までの9名の就任演説を対象に行った方法に准ずる。すなわち、語彙レベルの特徴、文レベルの特徴、談話レベルの特徴、内容の構成の特徴を調べる。

分析対象とする演説文は、あらかじめ用意した文を実際に各首相が読み上げたとき、それを

聞きとって書き取った記録である。書き言葉として残っているものである。ゆえに、すでに述べたように、助詞、助動詞、接続詞など、漢字以外の部分はカタカナ表記されている。また、歴史的かな遣いの表記がされている部分もある。これらの書き言葉の文体的特徴については、最後のまとめで、鳩山首相（1954年）から大平首相（1978年）までの文体と比較するとき述べる。

先に述べたように、明治期の内閣は、天皇直属の機関であり、国民に対する責任がなかった。就任演説でも、首相として天皇より大命を拜したことを議会に参加している目前の議員達に伝えるといった概念で構成されている。

1 山縣有朋の第一回帝国議会施政方針演説（1890年12月6日）

山縣有朋は、伊藤博文、黒田清隆に継ぐ3代目の首相である。しかし、第一回帝国議会が開かれたのは、山縣内閣のときからである。それゆえ、第一次伊藤内閣、黒田内閣の就任演説がない。従って、日本で最初の就任演説は山縣の最初の施政方針演説となる。この年の前年1889（明治22）年2月11日に大日本帝国憲法が公布された。山縣は、軍人であり、西南の役では征討参謀であった（岡野（1985:48-50）より）。

1. 1 語彙レベルの特徴

自分を指すのに「本官」と称している。聴衆を指す場合は「諸君」の語を使用している。この場合、目前の議員達を指している。両者を含めて指す「我々」や聞き手各人に向けた「各々」の語もみられる。謙譲語の「存ジマス」や丁寧語の「御座リマス」、助動詞「マスル」「マシテ」「タリ」の用語が頻繁に使われている。また、「御座リマセヌコトデ御座リマス」「致シマシタデ御座リマス」「御座リマスイト存ジマス」などのように、敬語を並べ非常に堅苦しい複雑な表現の文体となっている。「述べる」に相当する表現として、「陳述致シマスル」「弁明致シマスル」「断言スルニ」「一言ヲ吐露シテ」「申ス」「演（の）ベマスル」「申述べマスル」というように、固苦しい様々な表現を用いている。否定表現を使って強い主張の意味を示す表現も多々使用されている。「慶賀ニ堪ヘザル次第デ御座リマス」「必要ヲ見マセヌデ御座リマス」「相違御座リマセヌコトデ御座リマス」「憚カラストコロデアリマス」「信ジテ疑ヒマセヌ」「申ス迄モノイコトト存ジマス」「御座リマスマイ」「進マナケレバナラス」「御座リマセヌ」「十分トハ申サレマセヌ」「致サナクテハナラスコトト存ジマス」「力（つと）メナケレバナラスコトト存ジマス」「外ナラスコトト存ジマス」「止ムヲ得ザル必要ノ」「尽サネバナラス」「難キコトハナイコトト存ジマスル」。「トコロ」「コト」の表現を挿入しているため複雑な長々しい表現になっている場合が多い。「光栄トスルトコロデ御座リマス」「滞ルトコロノ負債ヲ」「負担スルトコロノ至重ノ義務」「償還スルコトニ努力致シマシタ」「一定スルコトヲ得マシタ」「脱出スルコトハ致シマセヌ」「決して変化スルコトハ御座リマスマイ」。他にも内容的にはほとんど意味のない語彙を挿入して冗長な表現になっているものも多い。「陳述致シマスルノ機会ニ遭遇致シマシタガ」「甚ダ遺憾ノ至リニ存ジマス」「比ノ短日月ノ間ニ於キマシテ」「今ノ時ニ方（あた）リマシテ」。同じ意味で異なる表現を重ねている部分も多くみられる。「政府ノ執ル所ノ政策ニ於キマシテ」「総予算ヲ提出致シマシタルハ、比ノ歳計予算ニ就キマシテ」「諸君ノ注意ヲ冀ハンコトヲ望ミマス」「一朝一夕ノ話ノミデ之ヲタシ得ベキコトデ御座リマセヌ、必ズ

ヤ寸ヲ積ミ尺ヲ累子テ」「我々境遇ニ伴フ所ノ一箇ノ利益ヲ犠牲ニ供シテ、公平無私ニ」「胸襟ヲ押開イテ、腹蔵ナク相談シ相議スルニ」「内治即内政」「協心同力」「共同一致」。

以上述べてきたように、全体としては、丁寧な言いまわしの「存ジマス」「御座リマス」「アリマスル」「マシテハ」などの使用がほとんどであるが、後半になり、「思ヒマス」「デアル」「デアッテ」のような表現が現れている部分もある。これらの表現が現れることで、冗長的な調子に変化がついている。その部分は、予算内容についてであり、具体的に政策方針の内容に入った部分からである。「デアル」の断言表現を使用している5文の内容は、特に政策の態度を述べている部分なので、強調の意を示すために用いたと考えられる。「抑々今ノ時ニ方リマシテ国家ノ最急務トスル所ノモノハ、行政及地方ノ制度ヲ整へ運用ヲ敏活ナラシメルコトデアル」「蓋国家独立自衛ノ道ニ二途アリ、第一ニ主権線ヲ守護スルコト、第二ニハ利益線ヲ保護スルコトデアル、其ノ主権線トハ国ノ疆域ヲ謂ヒ、利益線トハ其ノ主権線ノ安危ニ、密着ノ関係アル区域ヲ申シタルデアル」「寔ニ是ハ止ムヲ得ザル必要ノ経費デアル」「速ニ払尽サネバナラヌ共同義務デアル」。

すでに述べたように、なるべく同じ語句を繰り返さないようにしているとみられ、同じ意味で異なる表現を多様に使用している。「最急務」「最必要」「最緊要」や「我々ノ共同事務」「比ノ共同目的」「共同一致」「共同義務」。ただし、「主権線」と「利益線」という語句は各5回ずつ繰り返し使用されている。これが、キーワードと考えられる。これらは、全体にわたって出現しているのではなく、これらの説明をしている後半の部分のみにある。

1. 2 文レベルの特徴

全文、叙述法の文で構成されている。英語では、not～but構文で、否定文の後にbut以下の肯定文で強調する型が多く使用されているが、この演説では、まず肯定文で述べ、否定文で強い主張を表す型が多く用いられている。「我々一様ニ同一ノ軌轍ノ上ニ進ミ行キツツアリ、決シテ比ノ一大圏線ノ外ニ脱出スルコトハ致シマセヌ」「比ノ事タルヤ諸君及我々ノ共同事務ノ目的デアッテ、独政府ノナスベキコトデ御座リマスマイ、将来政事上ノ局面ニ於テ何等ノ変化ヲ現出スルモ、決シテ変化スルコトハ御座リマスマイト存ジマス」「比ノ一直線ノ方向ヲ取ツテ、比ノ共同ノ目的ニ達スルコトヲ誤ラズ」。英語での話者の判断、主張を示す助動詞に相当する表現を使用した文もみられるが、「思ヒマス」「存ジマス」が続いているため主張の調子が和らげられ、聞き手に強く訴えかける感じではない。「進マナケレバナラヌト存ジマス」「保護致サナクテハナラヌコトト存ジマス」「之ヲナシ得ベキコトデ御座リマセヌ」「力(つと)メナケレバナラヌコトト存ジマス」。

長い副詞句が前置されている場合が多い。それらは、何についてかのその文の話題を明示していたり、話題の方向へ導く枕的要素となっているものが多い。「勅語ニ於キマシテ、其ノ大体ヲ明示致サレマシタ以上ニ、今更ニ本官ガ事々シク弁明致シマスル必要ヲ見マセヌデ御座リマス」「偕明治大政維新ノ時ニ膺リマシテ、世運ノ変遷ヲ察シテ一旦比ノ方向ヲ変ジマスルト、過去数百年間滯ルトコロノ負債ヲ償還セネバナラヌト云フ事ニ気ガツキマシタ故ニ、我々が比ノ短日月ノ間ニ於キマシテ、其ノ負債ヲ償還スルコトニ努力致シマシタデ御座リマス」。日本語の文体的特徴として、その時に応じて身近な話題から徐々に入り、核心部へと本題に導くスタイルがある。英語の場合は、まず話題を明確に示して、具体例へと詳細に解説していくスタイルである。この特性が、文レベルでも生じていて、長い副詞句が前へ出てきていると考えら

れる。

1. 3 談話レベルの特徴

文と文をつなぐ接続詞、「サリナガラ」「併シ」「偕（さて）」「然ルニ」「併シナガラ」「故ニ」「仰々（そもそも）」「又」「サレバ」「亦」のように多様な種類が使用されて前後の文の関係がはっきり示されている。他に副詞だが、「ニ於キマシテ」「就キマシテハ」のように、話題文を明示する語句や「第一ニ」「第二ニハ」「以上」のように構成をはっきり示す語句や文頭に使用される「顧みるに」「勿論」「今」「即（すなわち）」「蓋シ」「凡ソ」「仮令（たとい）」なども用いられている。前文の内容を指す「比ノ」「其ノ」「是ニ」などの指示語も使用されて、文の流れがわかりやすく続いている。

平行文の使用もみられる。「或ハ之ヲ緩ニシ、或ハ之ヲ急ニシ又ハ比ノ方ヲ執リ、又ハ比ノ法ニ依ルコトニ至リマシテ」「其ノ主権線トハ……利益線トハ……」「上ハ聖天子ノ宏遠ナル皇謨ト、下ハ先進諸氏ノ翼賛計画スルトコロニ」。

平行文以外でも対句表現を含んだ文が見られる。「今其ノ小異ハ姑（しばらく）ク擱キマシテ、時勢ノ大局上ニ就イテ」「仮令小異ハアルトモ、其ノ大体ニ就キマシテハ」「主権線ヲ守禦スルノミニテハ、決シテ十分トハ申サレマセヌ、必ズ亦利益線ヲ保護致サナクテハナラヌコトト」。

1. 4 内容構成の特徴

まず初めに、天皇より首相という大命を受けたことを述べている。「天皇陛下カ至仁ナル聖慮ニ依リマシテ、曩キニ千歳不磨ノ大典ヲ立テサセラレ、茲ニ諸君ト相会スルヲ得タルハ、誠ニ国家ノ為慶賀ニ堪ヘザル次第テ御座リマス、又本官ノ光栄トスルトコロテ御座リマス」。次に、この演説で政策方針の要点を述べることを告げる。本題に入った最初は、鎖国以来から明治維新の歴史を振りかえり、現在の状況、意義を述べる。この展開は、アメリカ大統領の就任演説の展開と同様である。アメリカ大統領の就任演説では、建国以来を振りかえりその演説時代の状況、意義を述べる構成がとられている。次に予算についての説明を始めている。その中で、軍事費を大幅にとっていることの解説が主となる。それは、国家の独立と国勢の拡張についての必要性を言及することである。ここでは、主権線の守護と利益線の保護という表現を使用して説得表現が続く。最後に、聞き手にこの政策に賛同してくれることを願う表現で終わる。「本官ハ幸ニ諸君ノ了察アランコトヲ望ミマス」。

上記でみたように、全体の内容構成概略は、現在のアメリカ大統領の就任演説や現在の日本の首相の就任演説と似ている。しかし、本題の内容において、日本の国からだけの視点だけである点や内政の方針でも分類して述べていない点は異なっている。言語的構成では、後半部分の演説内容の核となる部分がそれまでの調子とは異なる語句の変化や平行文、対句表現、繰り返し表現などや否定文での強調表現などの工夫で盛り込まれているが、言いまわしが冗長的なためと堅苦しい表現のために、せつかくのこれらの工夫もかえって、より複雑な表現となり、実際聞いたときは内容の焦点が埋もれてしまった文章になっていると思われる。

2. 松方正義の第二回帝国議会施政方針演説（1891年11月30日）

松方首相は、参議大蔵卿、蔵首を歴任し、日本銀行を設立し総裁になった、経済面に精通し

ている人物である。

2. 1 語彙レベルの特徴

自分を指すのに、初めの挨拶の部分と終わりの結びの部分と以前自分が述べた事実を指す場合の3カ所のみ「本官」と称し、他では、「政府」としている。聞き手に対しては、「諸君」と呼びかけている。述語動詞に「信シマス」「賀シマス」「覚悟デアリマス」「認メマス」「考デアリマス」「考ヘマス」など話し手の心的態度を明確に示す語が多く使用されている。述語の助動詞では、「デアリマス」「マス」「デアル」「マセヌ」「マシタ」が多く使用されている。また、「～ノコト」の表現は多く見られるが、「～スルトコロ」の使用が最後の結びの一文のみしか使用していないため、山縣の文よりかなり内容が簡潔明確に伝わる文になっている。しかし、漢文調の表現も多く使用されていて、冗長な調子は避けられていても堅苦しい調子は残っている。「宿望ヲ遂グル覚悟デアリマス」「拡張セシトニ由リマシテ」「材料タル鋼鉄ハ」「損害トヲ避クルタメ」「創立スルノ議ヲ」「必要ナル法律案ハ」「協賛ヲ求ムル」「出来ザリシハ」「農会法ノ如キハ」「工事ヲ早ムルト同時ニ」。同じ意味の表現を異なる表現で言いかえるようなことはなく、同一語を使用している。「最モ緊要ノ事ニテ」「甚ダ緊要デアル」。

キーワードとして、「国防」4語と「国家経済」2語があげられる。これらの語に相当する「国家ノ権利ト利益」や「国家経済」に相当する「財政」5語があり、これらの語句は演説文全体に散らばっている。

2. 2 文レベルの特徴

全文、叙述法の文で構成されている。丁寧語の「デアリマス」と断定表現の「デアル」と否定表現の「マセヌ」の文がほぼ交互に現れている。「……百難ヲ排除シテモ必ズ宿望ヲ遂グル覚悟デアリマス、国連ノ進歩ハ中途デ停滞シ又ハ退縮スベキデアリマセヌ、……諸君モ御承知ノ通デアル」。ここにみられるように、丁寧語の「デアリマス」は話者の心的態度を示す動詞とともに用いられて話者の態度を述べる文となり、否定表現の文は話者の心的態度を示す助動詞とともに用いられて話者の主張を示し、「デアル」の文は断定の意を表している。「決行シナケレバナリマセヌ」「緩慢ニ付シ置クコトハ出来マセヌ」「仰ガネバナリマセヌ」。また、過去形の「マシタ」の表現も所々で出現し、報告の機能を示している。「其経費ヲ二十五年ノ予算ニ組込ミ置キマシタ」。これらの表現の変化が文全体が単調な調子なるのを避ける効果を成している。

「～ハ」の構成で、話題を示す副詞句が前置された文が多い。この述語動詞「提出致しました」の主語は省略されているが、話し手もしくは、話し手が代表となっている政府である。「従来地方費支弁ノ監獄費ハ、以後国庫ノ負担ニ映スコトニ決定シテ既ニ其法律案ヲ提出致シマシタ」

2. 3 談話レベルの特徴

各段落の始めの文頭部 (theme) で、明確にその文の話題 (topic) を表す語句がある。「国防ノ必要ニ付キマシテハ」「鉄道ハ」「治水ノ事業ハ」。その各段落の中で、文と文を結ぶ接続詞がある。「～併シナガラ……」「～去ナガラ……夫故ニ……」「～又～」。全体の構成を示す語句は無いが、「諸君」という呼びかけ語が、初めと終わりの結びの部分に現れていて、

聞き手への合図となっている。

2.2の文の特徴で述べたように、述語部が口語調の丁寧語の「デアリマス」や断定の「デアル」や文語調の否定の助動詞を伴う「マセヌ」が現れるように、表現的には一定した体を成していない。しかし、主張の度合いなどを伝える機能を活かした使い分けがされていて、音声で聞くときには、不統一感を感じることはないように思われる。

平行文は、2カ所みられる。「去ナガラ進歩ノ事業ヲ施行シマスルニハ、常ニ財政ノ如何ヲ顧ルコトガ甚ダ緊要デアル、夫故ニ是迄モ十中ノ半バストラ事業ヲ決行スルコトニハ、常ニ財政ノ如何ヲ顧ルコトガ甚ダ緊要デアル、夫故ニ是迄モ十中ノ半バストラ事業ヲ決行スルコトノ出来ザリシハ、常ニ遺憾ニ思ヒマシタガ」「政府ハ外ニ向ッテハ益々和親ヲ厚クシ、国権ヲ拡張シ、内ニ在ッテ国防ヲ充実シ、実業ヲ奨励シ、国家経済ノ発達ヲ促シ」。前者では、「常ニ財政ノ如何ヲ顧ルコトガ甚ダ緊要デアル」の全く同じ表現を繰り返して、それに続く表現「夫故ニ是迄モ十中ノ半バストラ事業ヲ決行スルコトニハ」は、肯定のこの文とこの否定文「夫故ニ是迄モ十中ノ半バストラ事業ヲ決行スルコトノ出来ザリシハ」の対となっている。また「如何」と「遺憾」の発音が同じで異なる意味の語句を使用した技巧に富んだ文となっている。これは、書いた文章をじっくり眺めたときは気付くが、音声で一回聞いただけでは、複雑で文意そのものも理解しにくいと思われる。後者の文は、「外」と「内」が対句となっていて、文意が簡潔で明確となっている。形式は対句的になっているが、使用されている語句は異なっているためにまぎわらしい感じもない。

2. 4 内容構成の特徴

初めに、挨拶、次に維新以来からの政府の状態を簡単に述べている。本題に入り、まずキーワードと類似の「国家ノ権利ト利益」を出して、演説文の内容の方向性を示している。

そして、キーワード「国防ト国家経済」の語句を出して、まず「国防」について述べている。その中では、具体的に「兵器船艦ノ製造ニ最モ必要ノ材料タル鋼鉄ハ・・・鉄道ハ・・・治水ノ事業ハ・・・」と分類して述べていっている。しかし、それぞれの項目では必ず経済的面と結びつける内容となっている。そして、「国家経済」に相当する「財政」の語句が増え始める。2.3の平行文で言及した「常ニ財政ノ如何ヲ顧ルコトガ甚ダ緊要デアル」の文が二度繰り返かえされているように、「財政」面の重要性を述べて本題を締めくくっている。演説文の結び部分は、本題のキーワード「国防」と「国家経済」を出してまとめ、最後に聞き手との協力で政治を行うことを望む言葉で終わっている。最初の挨拶文では、天皇への言及はなかったが、最後の挨拶文にはある。「諸君、諸君ト相共ニ提挈シテ益々皇室ノ尊栄ヲ加へ、人民ノ幸福ヲ進メ、国家ノ富強ヲ致シ、我帝国ノ光輝ヲ中外ニ発揚センコトハ、本官ニ於テ最モ切望スル所デゴザイマス」。軍人の経歴が強い山縣首相のときは、軍事費についての言及が主であったのに対し、大蔵大臣であった松方首相は経済面を主に述べているところが、各首相の経歴を色濃く反映した内容になっているといえる。また、軍人として権威を示すような堅苦しい回りくどい表現の山縣首相の文体に対し、比較的、簡潔表現である文体にも軍人らしさが反映されている。

3 伊藤博文の第四回帝国議会施政方針演説（1892年12月1日）

伊藤博文は、初代首相であるが帝国議会が3代めの山縣首相から始まったため、就任演説としては、第二次伊藤内閣成立時が初めての施政方針演説となる。しかし、怪我のため出席できず、伊藤首相が用意していた演説文を井上馨内閣総理大臣臨時代理が代読した。

伊藤博文は、松下村塾で学び、大日本帝国憲法（明治憲法）を制定した人物である。

3. 1 語彙レベルの特徴

自分を指すには「余等」「余」や「政府」を、聞き手には「諸君」、両方を含めた「吾人」を使用している。文末は、文語体の述語動詞、形容詞の終止形や助動詞「ナリ」で言い切る表現を使用している。「希望ス」「信ス」「得ス」「要ス」「在リ」「低減セントス」「異同アリ」「決心ナリ」「至難の業ナリ」「是ナリ」「収ムルハ難シ」。そのため、簡潔な調子ではあるが、その前の部分に「～コト」「～トコロ」が挿入されてまわりくどい表現になっている部分もある。「政府誠意ノ存スル所ヲ諒察セラレンコトヲ希望ス」「復タ止ムヲ得サル所ナルヲ信ス」「規定セサルコトヲ得ス」。漢文の書き下し文の調子となっていて、その熟語的用語の多用が厳かな調子を醸し出しているのと同時に、権威者による説得的な調子にもなっている。

3. 2 文レベルの特徴

様々な種類の文が存在する。命令文が一文ある。「諸君試ニ地図ヲ展ヘテ万国ノ形勢ヲ看一看セヨ」。疑問文が二文あるが、それは反語表現で、訴えかける機能をしている。「本邦ノ如キモノ果タシテ安クニ在ル乎」「至幸何モノカ之ニ加ヘニヤ」。否定表現による主張の表現が多くみられる。「目的ヲ達センコトヲ欲スルニ外ナラサルナリ」「付シテ止ムヘキニアラス」「躊躇セサルノ決心ナリ」「吾人自ラ驚喜ニ堪ヘサルモノアリ」「常ニ其調査ヲ怠ラサリシ」「一片ノ微衷自ラ禁スル能ハサルアレハナリ」「他意アルニアラス」「必要欠クヘカラス」。二重否定により強い肯定の意味をもつ文もある。「各国多少ノ軋轢紛擾ナキニアラス」「唯タ上下協同ノ力ニ憑ラサルヘカラサル」。

3. 3 談話レベルの特徴

全体の内容構成を明確に示す接続詞はないが、各まとまりごとの構成を示す接続詞はある。それらの多くは、「然レトモ」「故ニ」「而シテ」「即チ」「雖モ」など論理的構成を示す接続詞である。この論理的調子も説得的な調子に結びついている。また、各まとまりの最初の文の文頭部分に、その文の話題の要素があるので、各内容は理解しやすい構成となっている。「政府ノ大方針ハ」「百般行政ノ改良ハ」「今坤球ノ全図ヲ観レハ」「外交ノ事ハ」。また全体構成の合図となる内容の文が終盤にある。「諸君余ハ終ニ臨ミ特に諸君ノ清聴ヲ請ハントスル一事アリ」。

3.2で述べた命令文や疑問文は、最後の挨拶部分の前の内容まとまりの段落にある。本題の最後に、強く聞き手に訴えかけていく調子を作り出す工夫となっている。

3. 4 内容構成の特徴

初めに挨拶文で、天皇より大命を受けた報告を含んでいる。「諸君余等曩ニ至尊ノ大命ヲ恪

ミ国務大臣タルノ重任ヲ辱クシ嗣後僅ニ数閱月而シテ今ヤ本年議會ノ期ニ及ヒ政府将来ノ方針ヲ諸君ノ前ニ開陳スルコトヲ得ルハ余等ノ職務上ニ於テ殊ニ光荣トスル所ナリ」。次に本題に入り、まず、政府の方針の概略を簡潔に述べている。そこでは、「憲法ノ条章ニ遵由シ、行政百般ノ機関ヲシテ憲法的ノ動作ヲ為サシメ以テ益々其改善ヲ図リ」とあるように、憲法に基づくことを述べている。以下の本題内容では、実行は困難であるが協力して成し遂げるように促すこととすでに決定している予算案の内容についての賛同を求める訴えが続く。最後に再び協力を呼びかける説得文が続いて、締めめの挨拶文がある。そこでは、再び、大命を受けて政府の方針を述べたことを「欣榮デアル」と言っていて終わっている。

伊藤首相が大日本帝国憲法（明治憲法）を制定したことを考えると、先の二人の首相同様に、自分の得意分野に触れて述べている演説文といえる。

4 桂太郎の第十六回帝国議会施政方針演説（1901年12月12日）

桂太郎は、この翌年の1902年に日英同盟を締結させる軍人出身の人物である。この施政方針演説の2年前の1899年に北清事変が起こっている。

4.1 語彙レベルの特徴

自分を指す語は「本大臣」を使用し、聞き手には「諸君」と呼びかけている。文末の助動詞には、「デゴザイマス」「マシタ」「デゴザリマス」を多用している。また、「～シマシテ」で文を次々繋いでいる。「～加ヘマシテ～就キマシテモ～協同シ～努メマシテ～進メ～了リマシテ～至リマシタ」「～共ニ～鑑ミマシテ～関シマシテハ～注意ヲ致シマシタ」。

名詞に丁寧語の「致シマスル」をつけて動詞化した語句も多用されている。「遭遇致シマスルヤ」「恪守致シマシテ」「節約致シマシテ」。先の三人の演説文と比べてかなり口語的調子になっている。使用されている語彙も日常的な平易なものが多い。「光荣ト致ス所」「切ニ希望致シマスル」。簡潔な表現の丁寧語を用いているので、まわりくどい感じはないが、文が次々に切れ目なく繰り出されている感じで、かえって単調な調子をつくりあげている面もある。次々話題が進む点では軽快な調子であるが、結局印象に残る内容がないままで終わる感じである。

4.2 文レベルの特徴

全文、叙述法で構成されている。4.1で述べたように、「マシテ」で次々繋がっていて、一文が長い。また、「マシタ」の過去時制を使用した、できごとの報告の機能を果たしている文が多い。「茲ニ其一段落ヲ告グルニ至リマシタ」「以テ事局ノ終結ヲ勗メマシタ」「差障ナカラシムルコトヲ得マシタ」「平順ナラシムルコトニ務メマシタ」。

4.3 談話レベルの特徴

先に述べているように、連用形や助詞「テ」で、文を繋いでいっているので、接続詞はほとんど無い。初め挨拶部分で、冒頭に「諸君」の呼びかけで始まり、最後の締めくくりの部分でまた、「諸君」の呼びかけで区切りを示している。「諸君、本大臣ハ曩ニ大命ヲ奉ジ、重責ヲ担フニ至リマシタガ・・・」「諸君、現在及将来ニ於キマスル所ノ政務ノ概要ハ、今茲ニ陳述ヲ致シマシタ通りデゴザリマス、諸君、本大臣ハ諸君ノ公平ナル審議協賛ニ依リマシテ、国務ノ

進行円滑ナルヲ得、以って国家ノ進運ヲシテ、益々堅実ナラシメンコトヲ、切ニ希望致シマスル次第デゴザリマス」。

また、導入部分では「ゴザイマス」、本題部分では「マシタ」、締めの部分では「ゴザリマス」が使用されていて、構成の変化と文体の変化が一致している。

平行文が一カ所あるが、主張や強調の機能はない。「経費ノ節約スベキモノハ臆テ之ヲ節約致シマシテ、一方ニ於キマシテハ金融界ノ緩和ヲ計ルト同時ニ、一方ニ於キマシテハ歳計上ニ差障ナカラシムルコトヲ得マシタ」。

4. 4 内容構成の特徴

最初に、天皇より大命を受けた意を含む挨拶がある。次に国家の基礎を堅固にするという理由から列国との結びつきの強化の必要性を説き、交渉した事実を報告する文意が続く。その後財政の話題に移る。ここでも予算における苦労話的報告をしている。しかし、それらは具体的な事例ではなく、4.3の平行文の例文内容が示すような抽象的表現に留まっている。最後に4.3で引用しているように、聞き手たちの協力で政治を行うことを希望すると述べて終えている。

桂首相が列国との条約締結に関わっていることから、この演説文も首相の関連している分野をとりあげて述べたものとなっている。

5 西園寺公望の第二二回帝国議会施政方針演説（1906年1月25日）

西園寺首相は、ソルボンヌ大学に留学をした経験を持つ。1904年～1905年にかけて、ロシアと満州、朝鮮の覇権を争った日露戦争があり、日本の勝利となる。この施政方針演説の前年の1905年に、アメリカ大統領T. ルーズヴェルトの斡旋によりポーツマス講和条約を結んだ。また、伊藤博文が韓帝と韓国の外交権を日本に委任することを取り決めた第二次日韓協約の調印をした。同年、ロシアを牽制する目的で締結した1902年の日英同盟も改定された。

5. 1 語彙レベルの特徴

自分を指すには「本大臣」を使用し、聞き手には「諸君」を用いている。丁寧語の「ゴザイマス」を文末に多用している。他に「ト存ジマス」「考ヘマス」のように文末を「マス」で終えている。桂首相よりはやや格式ばった語彙を使用しているが、比較的平易な表現が多い。「大政ニ関スル所見ノ梗概ヲ陳述致シマスルハ」。

5. 2 文レベルの特徴

全文、叙述法である。話し手の主張を示す助動詞を伴う文があるが、丁寧語の助動詞が付いているため強調の度合いが和らいでいる。「目的ヲ達セネバナラヌノデゴザイマス」「図ラナケレバナリマセヌ」「講ゼネバナラヌノデアリマス」「図ラネバナラヌノデゴザイマス」。否定文の形式で強い主張を表している文も多くみられるが、これらも丁寧語が付随していることで、強調の度合いが和らいでいる。「一日モ緩クスルコトハ出来ヌノデゴザイマス」「慶賀ニ堪ヘザルトコロデゴザイマス」。二重否定の文もある。「一ツトシテ緊要ナラザルモノハナイノデゴザイマス」。

5. 3 談話レベルの特徴

文は連用形で次々と繋いであるので、簡潔で口語的な調子である。「～当リマシテ、軍国ノ経営、内外ノ施設、～ニ適ヒ、～遺算ナク、～奏シ、～得マシタノハ、～ニ由リ、～勿論デゴザイマスガ、～奉体シ、～ニ従ヒ、～ニ応ジ、～ヲ披瀝シ、申サネバナラヌノデゴザリマス」。接続詞「又」「従ッテ」「而シテ」「即チ」などが使用されている部分もあり、そこでは、次の文がより具体的説明となっていてわかりやすくなっている。「現今内外ノ事務ハ至繁デアッテ而（しか）モーツシテ緊要ナラザルモノハナイノデゴザイマス、即チ政費ノ増加ヲ来スハ必然ノ勢デゴザイマス」。最後の部分の合図として「諸君、本大臣ハ、終リニ臨ンデ・・・」の表現がある。しかし、全体としては、構成の合図となる明確な接続的要素はないのでわかりにくい。

対句表現はあるが、平行文とはなっていない。「即チ内ニアッテハ財政ヲ鞏固ニシ、陸海軍ノ充実、・・・外ニアリマシテハ帝国ガ満州ニ於テ獲得シタル利権ノ実効ヲ収メ、韓国トノ協約ニ基ズキ、・・・」。

5. 4 内容構成の特徴

初めに、天皇からの大命を受けたことを述べた挨拶がある。次に日露戦争の勝利やポーツマス講和条約、日英同盟の改定、第二次日韓協約についての見解や報告を述べ、国力発展への必然性についての訴えかけと展開していく。最後に、聞き手の協力を願って終る。「諸君、本大臣ハ、終リニ臨ンデ諸君ガ比国家緊要ナル時局ニ際シ、能ク政府ノ意ノアル所ヲ諒セラレ、和衷協同、以テ協賛ノ任ヲ竭サレンコトヲ希ヒマス」。

内容が主として他国に対する対外的なことについて述べている点では、先例の首相たちの演説と同じで、自分が関与している項目をとりあげて述べている演説であるといえる。しかし、聞き手に協力を訴えかけていくレトリックには特異な点がある。

訴えかける部分で、首相個人の心情を表した表現を使って説得をしている点が特徴的である。弱い本音の部分の素直に表しながらも自らを鼓舞して事に当たる気概を表現している。「本大臣ハ比大責任アル枢機ニ当タリマシテ、実ニ恐懼措ク能ハザルノデゴザイマス、然レドモ亦奮ッテ蹇々匪躬ノ節ヲ竭サンコトヲ竊二期シテ居リマス」。この後に聞き手への協力を訴えていくのである。「諸君モ亦国家ノ比時運ニ際シ戦後経営ノ大経綸ヲ画スルニ於テ、協力一致国論ノ一定ニ努メラレンコトヲ、本大臣ハ切ニ希望致シマス」。

IV. まとめ

この章では、以上で分析してきた明治期の首相の就任演説の特徴についてまとめる。使用語彙に関しては、自分を指す語として伊藤首相が「余等」と文語調の代名詞を使用している以外は、「本官」「本大臣」と職名を用いている。鳩山首相以降では「私」の代名詞が使用されているのに比べると、個人としてより公の立場での発言であるという印象を強く受ける。聞き手として、目の前の議員を対象にして「諸君」と呼びかけ、国民を対象にした演説ではない。時代の推移とともに、堅苦しい熟語表現が多い漢文調的な語彙の使用から比較的日常的平易な語彙使用へと変化している。述語部の助動詞もまわりくどい言いまわしの長い丁寧語表現が、「致しましたでござります」から「ございます」のように、短い表現へと変わっていった。ま

た、「而して」「然るに」のような論理的関係を示す文語的接続詞の使用から、連用形や接続助詞「て」による文接続へと変化している。これは、音声的には軽快な調子を生み出しているが、内容的なまとまりを示す明確さに欠ける。

文頭の接続語の不在は、談話レベルにも影響していて、鳩山首相以降では内容ごとのまとまりを合図するような副詞句や接続詞が存在する演説文があるが、明治期の演説には、そのような言語的工夫は、山縣首相の演説文の一部分ぐらいにしか見当たらない。前置されている副詞句の多くは、その文に関する話題の導入の機能を果たしていて、前後の文との接続機能や演説文全体の構成の合図となる機能はほとんどない。松方首相の演説文は、文末部分で、丁寧語の「であります」や断定の「である」といった述語部の助動詞で文体の調子を変えて意味のまとまりを示す工夫がみられる。

文レベルでは、鳩山首相以降の演説文でもみられ、日本の演説の特徴といえる、否定表現による主張を示す文が多用されている。英語では、否定文は後に続く肯定文の文意を強めるために用いられている。

ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country

(Kennedyの就任演説1961年より)

一方、日本語では否定文自身が強い主張を示す機能をもつときがあり、後の否定文を強めるために先に肯定文を出すということがある。その使用は、山縣首相の演説にみられる。モダリティーを表す助動詞の使用の文もあるが、丁寧語の助動詞が付け加わっているため、モダリティー度が和らげられてしまっている。

内容では、最初に天皇から首相として大命を受けたことの報告を含んだ挨拶に始まり、各首相の関心の深い政治分野についての報告や方針を述べ、最後に理解を求めるという構成である。鳩山首相以降では、本題部分では、国内国外に大別され、国内での政策方針として、防衛、憲法、経済、中小企業、農業及び漁業、教育、治安というように細分類されて、それぞれについて触れ、政治に関わる全般について述べている。この点においては、明治期の首相の演説では、首相個人の政治の関心事が色濃く反映した内容となっている。

今回の明治期の演説の流れ全般に対していえることは、漢文調の文語体から口語体へと変化していることである。しかし、聞き手に訴えかけるための演説という意識がほとんどないため、音声的効果を含めた言語的工夫が特に配慮されているといえるものがない。対句表現や平行表現も書かれた文章を見たときにわかる程度のもので、聞き手に特に何か効果を与える機能をもった文ではない。ただし、各演説の後半部分で文体の変化がみられるものが多く、単調な一定調子を避ける配慮はなされているようである。最後の挨拶部分に関しては、聞き手に演説内容の理解を願う文から直接協力を求め訴える機能を伴った文へと時代とともに変化をしていく。

以上、本稿では明治期の首相の就任演説の文体を分析して特徴をまとめたが、この後の大正時代や昭和初期の時代の就任演説文についても分析考察をして、文体の変化や特徴を調べることを引き続きの課題としていきたい。

参考文献

- Crystal, David. (1987) *The Cambridge encyclopedia of the English language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Fries, Peter H. (1995) "Themes, Methods of Development, and Texts." In Hasan, Ruqaiya and Peter H. Fries. 1995.
- Ghadessy, Moheesen. (1995) *Thematic Development in English Texts*. London: Pinter.
- Goatly, Andrew. (1995) "Marked Theme and Its Interpretation" in A.E. Housman's A Shropshire Lad. In Ghadessy, Moheesen. 1995.
- Halliday, M. A. K. and Hassan, R. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halliday, M. A. K. and Hassan, R. (1985) *Language, context, and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. Victoria: Deakin University Press.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar -second edition-*. London: Arnold.
- (山口登、笈寿雄 訳 (2001) 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い』 東京：くろしお出版)
- Hasan, Ruqaiya and Peter H. Fries. (1995) *On Subject and Theme: A Discourse Functional Perspective*. Amsterdam: Benjamins.
- Leech Geoffrey N. and Michael H. Short (1981) *Style in Fiction: A linguistic introduction to English fictional prose*. London: Longman.
- Lakoff, Robin Tolmach (1990) *Talking Power: the politics of language in our lives* New York: BasicBooks.
- 松尾式之 (1987) 『大統領の英語』 東京：講談社
- 松尾式之 監修 (1998) 『20世紀の証言』 CDブック 第三巻 東京：アルク
- 松尾式之 (2002) 『大統領の英語』 東京：講談社
- McCarthy, Michael. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (安藤貞雄、加藤克美 訳 (1995) 『語学教師のための談話分析』 東京：大修館書店)
- Nakamura, Chisako (1998) "On the Style of J.F. Kennedy's Inaugural Address" 『龍谷大学大学院 英語英米文学研究』 第26号 pp.79-103
- 中村秩祥子 (1999 a) 「アイゼンハワーとケネディの大統領就任演説における文体比較」 『龍谷大学大学院研究紀要 (人文科学)』 20集 pp.51-67
- 中村秩祥子 (1999 b) 「英語演説の文体 —機能文法のThemeとMood分析による—」 *KWANSAI REVIEW* 第18号 pp.177-187
- Nakamura, Chisako (2001) "Effectiveness of Marked Theme in Speeches" 『大阪千代田短期大学 紀要』 第30号 pp.183-201
- 中村秩祥子 (2004) 「内閣総理大臣演説の文体分析—鳩山首相から大平首相について—」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第13号 pp.37-68
- 岡部郎一 (1992) 『政治コミュニケーション—アメリカの説得構造を探る』 東京：有斐閣
- 岡部郎一 (1994) 『大統領の説得術—人を動かすレトリック』 東京：講談社
- 岡野加穂留 編著 (1985) 『内閣総理大臣—就任演説にみる日本の宰相』 東京：現代評論社

- 大谷立美 監修 (1993) 『アメリカ大統領の英語』 CDブック 第三巻 東京：アルク
- Simons, H. W., and Aghazarian, A. A. (Ed.) (1986) *Form, genre, and the study of political discourse*.
Columbia, SC: University of South Carolina Press.
- United States Government (1989) *Inaugural addresses of the presidents of the United States from
George Washington 1798 to George Bush 1989*. Washington, D.C.: United States Government
Printing.
- Yule, George. (1996) *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.